

# 京都大学人文科学研究所共同研究最終報告書

## 1. 研究課題

『尚書』解釈の過去と現在

The Past and Present of Interpretation on Book of Document(Shangshu)

## 2. 研究代表者氏名

竹元 規人

TAKEMOTO Norihito

## 3. 研究期間

2018年12月 - 2019年03月

## 4. 研究目的

『尚書』は中国最古の書物の一つであり、儒教の経書として長く読み継がれ、歴史史料としても用いられてきた。そのため、その書物としての成立から具体的な解釈に至るまで、長い研究の歴史が存在し、「尚書学」という一つの学問領域を構成している。「尚書学」は、それをタイトルとした国際会議が継続して開かれるなど、近年研究が再び活発化しつつある領域でもある。本プロジェクトでは、中国経学史・清代学術史で著名な陳鴻森氏と、申請者による研究発表を行い、過去(主に清代)の『尚書』研究・解釈を踏まえながら、現時点での新たな解釈を示す。それによって、長い歴史を持つ「尚書学」の領域に新たな知見を加え、国際的にその成果を発信することを目的とする。『尚書』の学術的・歴史的重要性から、本研究は古代から現代までの中国学術史全体にとって意義を有するものである。

## 5. 研究成果の概要

国際学術会議「『尚書』解釈の過去と現在」における、陳鴻森氏による「高宗諒陰」に関する発表は、氏の長年の研究の成果であるとともに紀元前以来の懸案を解決するもので、参加者一同は『尚書』及び経籍の訓詁・歴史研究について、深い認識を得ることができた。竹元の発表では、崔述の『尚書』認識が先行する明代の梅鷟(1483 頃-1553)、清代の閻若璩(1636-1704)、惠棟(1697-1758)らといかなる異同があるか明らかにした。討議では、今後『尚書』に関して進めるべき研究の方向・テーマが示された。

セミナー「文史哲——文学と哲学から見た『文史通義』」では、中国中古文学の観点から『文史通義』における章学誠の議論を見直すことができた。

台北における研究者へのインタビューにより、台湾での近年の『尚書』研究動向を、大学での経学関係の教育研究の現況とも合わせ、詳しく調査することができた。

6. 共同研究会に関連した公表実績

上記の研究集会(2回)および下記の論文(1本)

7. 研究成果公表計画および今後の展開等

陳鴻森氏の講演については、完成された論文を『東方学報』に掲載する予定である。台北におけるインタビューの内容については、整理して日本の学術出版物上で公表することを目指す。本研究班で得られた認識や資料をもとに、今後『尚書』学(史)の研究を推進する。